「許されなかった帰還」を見て

特攻兵として飛び立った若者たちのことは、「知覧」、「きけ　わだつみの声」等を読んではいたが、先日、TV 番組案内欄の「振武寮。それは帰還してはならなかった隊員の精神を鍛え直す施設だったといわれる。しかし、公式の資料は皆無に近く、帰還した隊員が表に出ることもなかったため、全ぼうはほとんど知られていない。」が目に止まり、「許されなかった帰還　～福岡　振武寮～」を見た。

学徒出陣で特攻隊に配属され、知覧から沖縄沖に片道の燃料と爆弾を抱えて飛び立ったが、特攻機の故障や敵の砲撃等で不時着して帰隊したが、その存在を知られると後に続く隊員や世間の志気に関わるということから、外部との接触を断つために寮（兵舎）に隔離・軟禁された帰還兵に関する番組であった。

また、無謀な作戦と思いつつ特攻死する自らの死の意味を探ろうとしていた若者たちの様子にも触れられていた。

隔離・軟禁された寮では、毎日上官から「生きて帰還したことを、恥と思え！特攻死した戦友を思えば、よく飯が食えるものだ！」等と徹底的に難じられ、沖縄戦から本土決戦への軍の戦略転換により全国の敵が上陸しそうな港湾都市に配属され、特攻隊員として死ぬことを強要され続けたとか。

そうした方々と、特攻としての死を強要した上官の、今になってようやくの告白のルポで構成されていた。

ある元特攻兵は、帰ることのなかった戦友に自分が生きながらえたことで、戦友の写真へ朝夕痛恨の詫びの語りかけの日々、また、元上官は戦後も生き延びた元帰還兵からの報復を恐れ、身を隠し８０歳台の死の間近まで、一時としてピストルと軍刀を肌身離さず過ごしたという。

戦争とは、現実には否応なく一人一人の国民が巻き込まれ、その一人一人の生きている意味、意志すら「国のために」という前には末梢されることでもある。

また、戦が終わっても、一人一人の人生に深い陰を落とすものである。

それを正にこの番組は語っているように思った。

この隔離・軟禁された寮が存在したことは、軍史に一行たりとも記録・記載されていないという。

それだけにこうした歴史に隠されたことを掘り起こそうとするルポライターのたゆまぬ努力に敬意を抱く。

遺品、遺跡等の保存と同様に、戦争の悲惨さを物語る隠され続けたこうした人々の苦悩・苦痛を伴う告白証言も次の世代に伝え継がれていくことを願う。

（2006 年 10 月 23 日　記）